

D&Dグループのラストワンマイル・パートナーズ（菊池正寛社長、東京都中央区）は6月中旬から、ドライバーの安全確保と健康管理を支援する新たな取り組みを本格的に開始している。心拍などの生体データをスマートウォッチが測定し、危険な兆候を検知するとドライバーに知らせるほか、特に危険な事態を招く恐れがあると認識した場合、管理者にも通知。これにより居眠りや健康に起因する事故のリスクを低減することも、生活習慣などを自主的に見直す機会をドライバーに与える。

ドライバーはenstem

ラストワンマイルパートナーズ

スマートウォッチが検知

居眠り 事故リスクを低減



1月からドライアル運用をスタート

（山本寛大社長、同）が提供 前から業務終了まで手首に装着するスマートウォッチを乗務 着。心拍数などの変動を基に

眠気、ヒヤリ・ハット、熱中症リスクなど心身のコンディションを判断し、本人と管理者に必要に応じて注意喚起することで事故が発生する確率を抑える。

1月からドライアル運用をスタートさせているが、運転中にスマートウォッチが振動して眠気を自覚したドライバーからは「助かった」との声が寄せられたのに加え、心拍の異常を把握したことをきっかけに病院を訪れて心臓が弱

かけに病院を訪れて心臓が弱っていると言われたケースもあるという。

更には、心拍数の変化と走行経路を突き合わせることで、より、ストレスにさらされる状況を可視化できるため、今後は新人のドライバーを指導する際の材料としても生かしていく方針。

営業部の林洋一・サービス課課長代理は「運送事業を拡大していくに当たり、ドライバーの安全と健康を守る取り組みは、同業他社との差別化にもつながる。測定したデータを介してコミュニケーションを深めることもできる。ドライバーには安全と健康への意識を高め、より長く働いてもらいたいと考えている。有期雇用（契約社員）や正社員の道も用意していきたいと思っており、自らの身を守る手段の一つだということを含め、ドライバーに理解してもらいたい」と語る。

（沢田顕嗣）